江の時十三枚

027
534
1

愛知女專
第 11777 號
圖書

027
534
1.

愛知女專
圖書

いてたつやるむまやうそて
愛もとあるかなし笠風景
包よ便あ三人や月お
江戸峰と人さそとりハ中の二夕
月ハ九月よそ

暉牛
里三
文砂

一

品川

朝夕もえし海や其中に菊の水　里三

林く毛野もうけく錦紅上総山　文砂

船霧かかるそ何しよ上総沖　暉牛

東海寺

青葉より紅なふや海のあさけ　里三

大森

麥ふくらの花入炭人野路の菊　暉牛

秋子映きし麦藁の花細工　文砂

川崎　鮮魚茶店にて

月光を茶に浮さして涼宿る　暉牛

林一きよ子帖子止　里三

肌寒子んに要志まるん　文砂

二

菊月香や茶一杯飲まし　仝

はるみ

ちんちろ霍乱声セよ秋の律　仝

戸塚　ふとまろく

衣手袖子霜枯のめつらき　暉牛

暮言葉ゆゆ子

行秋こいも祢と多ぬ戸墳　里三

家踏て我家ハ柴の戸うら枯　文砂

ちるかき山

ちる鹿の一声うけよもあれ山　里三

松の岡

案山子見よ松の岡なる蘆の果　文砂

秋風の爪音聞うむかりの岡　暉牛

建長寺

悟る身ハ切と文行未来ハ　文砂

三

掃く庭ハちる葉や掃ハ紅葉　暉牛

秋深し坐禪の庭の蟋蟀　仝

かまくら

只今惟鵬鵠のかんと数そ

鎌くら戸今ハ野山のもみぢ哉　仝

時頼公の像を拜し

雪花も詠ぶ寺ハ秋の暮　文佐

叡慮八つ七郷へ歩く　文砂

雲間奉納の歌

あふくそやふ代の春ふあふ霞の間
ふるゆきあるし秋や紅葉なるらん　仝

同法楽

こてふふ向ふ扇もいてふ　暉牛

四

稲むらの崎

いなむらの崎の苅田老の秋　暉牛

七里濱

折りふや桜紅葉を見ふて　仝

碎けふは月ふ秋や玉　仝

秋の夜や三才図会の濱のぶん　文砂

暉牛珍圭

如半夜月淀の島て

江戸〳〵を江の嶋近十三夜　暉牛

江の嶋の神さま納の夜

この十そ〳〵よ夜いのる江戸繁昌
打よする波の音の色くさ哉　仝

島といふ魚といふ夜の月　里三

同奉納

磯の音め神千歳し秋風　文砂
芋ほりに童子やそよ嶋案内　里三

表八章

琵琶も琴も海に興あり後月　文砂
窟千耳をすませし秋風　里三
其海こそ長しの連立て　暉牛

嫌和ゝ千皇ゝ手心　文砂
閑居とハ見へけ鼠の柴垣　里三
夢ゝ冬ゝ價ハ問ハ茶屋臭　暉牛
宮さとハ見ての出ゝ雞卵酒　文砂
ひのゝくと付くを柘の実ゝ　暉牛

鎌ゝ北阜二曳ゝ江嶋
千ても會一千

花貝と茲子咲を菊の花　里三

隠士阜二丈子江の嶋おて
はなをすてゝ生る

其名聞こゆる秋風寂しさの音　暉牛

阜士の風流隠逸の場子なり

翁州を独立ものゝ愛さへ　文砂

江島三子の句茲子載

七

走る帆も月かたむく波の日　江島　千ゝ

東都三子のはゐ石を折ふし降ハ

島の名の降りてもつる波の月　仝　舟林

十五夜子如半ハ伊よ十三夜　鎌倉　阜二

舟林亭子てとりしのふ
日雅のこゝ至ふさみへる

三色咲菊子不見ぬあるは　仝